
小説の神髄い ???

澄田 康美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説の神髄い???

【Nコード】

N07370

【作者名】

澄田 康美

【あらすじ】

ある日、up主は小説を書いていてふと思ったのだ・・・自分の今までの経験を、誰かに伝えるべきだと！！東方のキャラクター、リグルを相方に、作者である澄田がわかりやすく？説明！！小説を書いている方、これから小説を書こうと言う方、小説を書きたいけど書き方がよくわからないって人必見？です！！ほのぼのゆっくりとやっていきますので、気楽にお読みくださいませ。

（前書き）

前書き

みなさんこんにちわ。これは小説とかそういう物ではなく、小説を書いている人とかに向けた指南作？です。

東方なんて知らなくても大丈夫です。あくまで相方なだけです。この話を通して、何か思っていただければ、それだけで澄田は満足です。

では、じっくりどうぞ。

澄田

「こんにちわ。早速登場の澄田 康美です。これから楽しくやっ
てきましょうー。」

リグル

「幻想郷から来たリグルよ。それより澄田、最初っからこれじゃ、
意味わからないじゃない。」

澄田

「そうそう、それを狙っていたんだよりグルン。」

リグル

「？」

澄田

「わしがこれから、わざと駄目な小説の一部分を見せるからさ、こ
れは手始めにつて奴。ちなみにこの書き方は、長い会話をやる時と
かに便利なのよ。」の中に会話をに入れて、その上にキャラの
名前を書けば、それだけで誰が喋っているとかわかるから、複数の会
話とかにも使えるからね。まあこれは違う作者さんの受け売りだけ
どね。」

リグル

「そうなのね。でもこれって本音はわざとじゃなくて、素でやらか
したでしょ？」

澄田

「・・・まあそんな事気にせず、早速やってみましょうか。」

リグル

「（あ、逃げやがったこいつー！）あ、ちなみにこうして会話の中に（ ）を入れれば、簡単にキャラの心理描写を描けるからね。覚えておいた方がいいわよ。」

サンプル1シーン

シチュエーション設定

実力が拮抗しているA君とB君が、剣を使って決闘をしているシーン

A

「くらいやがれ」

とAがいった。

AはBにきりかかった。

Bにはあたらなかった。

B

「あたらないなこんどはこっちのばんだ」

とBがいった。

BはAにきりかかった。

Aはふせいだ。

A

「甘いなこんどはこっちのばんだ」

とAがいった。

AはBにきりかかった。

Bはきられた。

B

「ぐわー」

シーン終了

リゲル

「・・・あのさ、これは何なの？」

澄田

「まるで駄目な小説。略してまだし。」

リゲル

「そんなマダオみたいに言われても・・・とりあえず、突っ込む所が多すぎるんじゃない？」

澄田

「そうだね、ちょっと抜き出しながらいつてみよう。」

A

「くらいやがれ」

澄田

「まずこれがひどいね。決闘のムードぶち壊しですよ。」

リグル

「いきなり会話で始める場合、もっとムードを出さないかね。」

澄田

「てか素人とかが下手にいきなり会話で始めるとか愚の骨頂。ちゃんと状況描写をしましょう。」

リグル

「後、誰に対してやってるのとかここは言った方がいいわね。」

澄田

「とりあえず、話し合った結果がこれです。」

Aが剣を構え、Bに言った。

A

「B、俺の剣を喰らいやがれえ!!」

澄田

「ほら、同じような台詞でも大分変わったでしょう?」

リグル

「そうね。！マークつけるだけとか、語尾に小さな母音をつけるだけでも、大きな変化になるのよね。」

澄田

「まあ、何でもかんでもつけていいわけじゃないよ。見極めるのが難しいけど、書いてたら自然とわかるもんだよ。」

リグル

「それじゃ、ごみみたいな状況描写を直していきましょう。」

とAがいった。

AはBにきりかかった。

Bにはあたらなかった。

澄田

「ちよいちよいちよいちよい、これはないよ君い?」

リグル

「自分で書いというて、よく言っわね。」

澄田

「教材用なんだから、他人事でいるのは当然!! まあとにかく、ズバッと直していきましょうか。」

リグル

「これはさっき直した関係上なんだけど、ここでAがいったってのは、この場合必要なくなるわよね?」

澄田

「そうそう、それはまあ修正上の問題としてだね、その次のこれ。AはBにきりかかった、ってところ。これじゃぶっちゃけ意味わから

ないね。」

リグル

「読み手に伝えたい事を伝えようとしているんですけど、これじゃちよつとねえ。」

澄田

「どう切りかかったのかとか絶対欲しいし、後この場合は力加減と
かも欲しいよ。」

リグル

「で、その次はBが避けた所ね。Bにはあたらなかった・・・まるで
ポケ。ンみたいない方ね。」

澄田

「うん、なんで当たらなかったのか書くべきだし、そもそも物足り
なすぎだよ。もっと工夫して書くべきだね。なるたけ漢字も使うべ
し。」

リグル

「じゃ、修正したのがこれね。」

掛け声と同時に、Aは力強く、Bに切りかかっていった。

しかし、BにはAの剣が届かなかった。BがAの剣を見切ったから
である。

澄田

「まあ、こんなもんだよね。これだったら疑問に思う事はわからない

と思うから。」

リグル

「それじゃ、次はいよいよBの台詞ね。」

B

「あたらないなこんどはこっちのぼんだ」

リグル

「うわぁ・・・これはひどいわね。」

澄田

「もはや小説でもなんでもないよ。幼稚園児の作文だよこれ。」

リグル

「その方がもっとマシでしょうね。」

澄田

「うだうだ言っているでも仕方ないので、早速取り組んでみましょうか。」

リグル

「まず行の区切り!!これじゃどこでどう読めばいいのか訳わからないわよ。」

澄田

「そうそう。そしてこの平仮名地獄・・・ここは幼稚園じゃないよあんだ!!」

リグル

「！マークとかも、この場合活用すべきよね。」

澄田

「当然です。それじゃ、直したのがこちら。」

B

「へー！そんな攻撃、当たらないな！！今度はこっちの番だ、A！
！」

澄田

「こつやつて、攻撃を避けた事を強調した感じにしたり、反撃する相手の名前を叫ばせたりすれば、より臨場感とかが増すからね。」

リグル

「それじゃ、次のやり取りを直していきましょう。」

とBがいった。

BはAにきりかかった。

Aはふせいだ。

リグル

「・・・ぶっちゃけるけど、一回ぐらい前に直したやりとりとほとんど一緒じゃない？」

澄田

「だからこそ、しっかりと直すべきなんだよ、リグル。」

リグル

「（いちいちいらっとくるわね・・・）で、どう直していくの？」

澄田

「さっきと同じ書き方だと、どうしてもワンパターン調子に見えるんだよね。慣れてない子はよくやるよ。」

リグル

「じゃあ、もっと違う文章にするべき・・・って事ね？」

澄田

「そうそう、それじゃ、早速やってみましょうか。」

Bの掛け声と同時に、Bの斬撃がAに襲い掛かろうとした。

Aは寸前の所で、Bの剣を自身の剣で受け止めた。

澄田

「こう書く事によって、Bが負けちゃうって感じを出せちゃうのよ。」

「

リグル

「襲い掛かろうとしたって所がね。後、寸前って言葉を使う事で、拮抗しているお互いの力をそれとなくかもし出せてるし。」

澄田

「それじゃ、今度はA君の駄目な台詞をずばっと直していきましょ

！。
」

A

「甘いなこんどはこっちのばんだ」

澄田

「えーっと、さっきのB君ばりに言っている事があれですけど、ここはちよつと直し方を変えてみましょうか。」

リグル

「！マークは使うけど、この場合は使い所を考えてみるのよね。」

澄田

「そう。無闇に使うんじゃないくて、ここって所で使った方が、勝利する」主人公って感じが出せるからね。」

リグル

「それじゃ、直してみたのがこれね。」

A

「甘いな・・・じゃあ、今度はこっちの番だ！！喰らええ！！」

澄田

「こうすれば、次の一撃は当たるって感じが出るんだよね。」

リグル

「ええ。この場合は下手にBの名前も呼んじゃ駄目。切りかかる事を強調するのが一番よ。」

澄田

「そんじゃ、そろそろクライマックス的な所を直してみましようか。」

とAがいった。

AはBにきりかかった。

Bはきられた。

澄田

「もうね、いちいち言うのが面倒になってきた!」

リグル

「でも言わなかったら、書けない人達が困るじゃない。」

澄田

「・・・はいはい、やればいいんでしょう・・・」

リグル

「（自分から始めておいて・・・本当勝手ね・・・）」

澄田

「えーっと、Bはさつき避けたわけですから、ここは避けられなかった感じを出してみるのが吉です。そんでもって、切ったダメージもそれとなく書いてみたら、もっといいと思いますね。」

リグル

「まあ、直したのがこれね。」

その瞬間、Aが既に反撃の一閃を、Bに放っていた。
動きが止まっているBは、その剣を避ける事が出来ず、自身の体を
両断された。

澄田

「こんな感じですね。両断って所はちょっと怖いですけど、まあ取りあえずです。」

リグル

「それじゃ、いよいよ最後の台詞、Bのやられ台詞ね。」

B

「ぐわー」

澄田

「これは・・・どう見てもおちよくっている!!」

リグル

「ようにしか見えないわね。最後の断末魔がこれじゃ、情けないってレベルじゃないわよ。」

澄田

「ええい!!断末魔ってのはこうやるんだよ!!」

B

「ぐ、ぐわああああ！！！！！」

断末魔の悲鳴が、戦場にこだましていくのであった。

澄田

「どうなもんだい！！これのよつて、Bがどれほどのダメージを負ったのがよくわかるね。」

リグル

「叫び声とかに、伸ばし棒とかはまずNG。伸ばし棒を使うのはゆるい台詞とか、名前ぐらいに使いましょうね。」

澄田

「それでは、直していった文章を全てくつつけてみましょう！！！」

Aが剣を構え、Bに言った。

A

「B、俺の剣を喰らいやがれえ！！！」

掛け声と同時に、Aは力強く、Bに切りかかっていった。しかし、BにはAの剣が届かなかった。BがAの剣を見切ったからである。

B

「へ、そんな攻撃当たらないな！！今度はこっちの番だ、A！！！」

Bの掛け声と同時に、Bの斬撃がAに襲い掛かろうとした。
Aは寸前の所で、Bの剣を自身の剣で受け止めた。

A

「甘い・・・じゃあ、今度はこっちの番だ！！喰らええ！！」

その瞬間、Aは既に反撃の一閃を、Bに放っていた。
動きが止まっているBは、その剣を避ける事が出来ず、自身の体を
両断された。

B

「ぐ、ぐわああああ！！！！！！」

断末魔の悲鳴が、戦場にこだましていくのであった。

リグル

「こうして見たら、ちゃんとした感じはするわね。元々と比べたら
それもひとしおよ。」

澄田

「・・・」

リグル

「ん？どうしたの澄田？」

澄田

「足りないな・・・これだけでは、小説と呼ぶのに不相応だ！！も
つとわしが大胆に改造してやる！！」

Aが己の剣を力チャッと構え、Bを見据えた後、自分を鼓舞するように吼えた。

「B、俺の剣を喰らいやがれえ！！」

その言葉に呼応するように、AはBにダンツと飛び込んでいき、Bに全力の剣撃を放った。

しかし、BにAの全力の剣は奇しくも届かず、ただ空を切った。BがAの剣を、完全に見切っていたからである。

「へー！そんな攻撃、当たらないな！！今度はこっちの番だ、A！！」

余裕な調子で、BはAに思いつきり切りかかった。

それをAは自身の剣を構え、寸前の所でガキインと防いだ。

「甘いな・・・じゃあ、今度はこっちの番だ！！喰らええ！！」

その瞬間、Aは既に反撃の一閃を、Bに放っていたのだ。

動きが止まっているBは、その剣を避ける事が出来ず、ズバアッと自身の体を両断されていた。

「ぐ、ぐわあああああ！！！！」

断末魔の悲鳴が、戦場にこだましていくのであった。

澄田

「そつだ・・・これでこそ小説じゃあないか！！H A H A H A H A

HA!!」

リグル

「・・・じゃあ、最初っからこう書けばいいじゃない・・・てそうか。これは教える為の物だったわね。」

澄田

「うん、そーだよ。まあ慣れればこんな感じの文章も、案外ぱつと書けちゃうものですよ。」

リグル

「どうでもいいけど、澄田の小説って全部こんな感じなの？」

澄田

「うー！それはその・・・ごめんなさい、最近うまくなったと言いますか・・・教えられたと言いますか・・・所詮、うp主もそこまですまくはないんですよえ・・・」

リグル

「じゃあ、なんでこれを書いて投稿した訳？」

澄田

「それは・・・まあ反面教師として、見習って欲しいと思ったんですよ。自分はかつて、他人の小説なんてろくに見なかった人間ですから、それはもうまるで駄目な文章でしたよ。まさにマダブですよ。」

リグル

「なんだか学まなぶみたいな言い方ね。」

澄田

「そう、だからこそ、わしの有様を見て学んで欲しいと思ひましてね。」

リグル

「誰がうまい事言えって言った。」

澄田

「まあいいじゃないか。それより、そろそろ時間が差し迫ってまいりましたねえ。」

リグル

「小説に時間なんてないでしょ？」

澄田

「とにかく、こういう物はまとめてみるのが一番です！！それじゃ、しっかり覚えていってね！！」

澄田の教訓

- 1、面倒でも、伝えたい事はしっかり書くべし。
- 2、文章は、なるべく同じ感じにしないべし。
- 3、強調したい所は、書いてみて思ってみるべし。
- 4、文章の区切りは、多いぐらいでやってみるべし。
- 5、描写は、最悪そのまんまでいいのでなるべく書くべし。
- 6、キャラの感情は、しっかりと出すべし。
- 7、効果音、戦闘音は意識して書いてみるべし。

澄田

「こんなもんですね。あ、後こういった会話文に、小さい。とかは別につけなくてもいいですよ？これは澄田が癖でやっている物ですから。」

リゲル

「試しに私でやってみるわね、ほら、点だけでも十分でしょ？会話分の最後だって、点とかつけずにそのままでもいいのよ」

澄田

「ま、最後に一言言うべき事があるとするなら、これはあくまで澄田の書き方だって事を忘れないでください。」

リゲル

「小説って言うのは、人それぞれに違う味があるものよ。」

澄田

「だから、これはあくまで参考程度にしてくださいな。」

リゲル

「後は、澄田が後書きで言う事があるらしいから、私はここまでね。」

澄田

「それじゃ、ここまで見てくださった皆々様、お疲れ様でした。」

小説の神髓い？？？FIN・・・じゃないよ！！

（後書き）

後書き

どうでしたか？（＾―＾）澄田渾身の指南書は？

自分が下手なくせに、教える身分とはいいい度胸だとか言われそうですね。まあいいじゃないですか（>―<）／

それでも、わしより後に始めた人は、どうやっても拙い文章になっ
てしまいますよ。わしだってそうでした。いえ、そうですねの方が
正しいですか。

今でも絶賛勉強中な身分ですから、これからもっともって成長して
いきたいです＼（>∩<）／

それじゃ、小説の書き方ではないんですけど、見てもらう人を方法
を増やす方法をこっそり教えましょう。

え？これって小説で読もうで書かれていた？まあ多少は受け売りで
すから、勘弁してくださいな。

それじゃ、澄田流読者増加術をご覧ください。

1、自分と同じ人間を探してみる。

これが割と簡単かつ手軽な方法です。主に感想くれた人とかですね。
その人を起点につながりを増やしていけば、読者も割と流れる事が

ありますよ。

2、難しいと思うかもしれないけど、気になった人の作品のレビューをしてみる。

感想や評価と違い、これは中々誰もしません。しかし、だからこそやるべき事なのです。誰もしないと言う事は、逆にしたら自然と目立ってますし、それにこれ、話の本質を見抜く力が養われるので、速読とかにも便利なんですよ。うp主はレビューを色々としている内に、平均時間の半分ぐらいではらららっと読める目がついちゃいました（＃＾|＾＃）速読できるようになれば、書き方の勉強とかにも役立ちますからね。

3、活動報告とか積極的に。

これも面倒だから嫌だとか言う人いるかもしれませんが、これって案外読者の人は見てくれている物ですよ。だから、面倒だからとか言わずにやってみてくださいな。

4、出来る事をする。

自分の読書のページを色々と覗いて見てください。結構便利な機能とかもありますからね。それを利用していけば、きっと読者数は増えていく・・・と思います。

えーっと・・・これぐらいですかね？後は感想とかでお願いします。

m () m

スペシャルサンクス

澄田 康美

リグル・ナイトバグ 様

A 君

B 君

わしにアカウントを与えてくださった心の友 黒詩鳥 様

わしに小説投稿の機会を与えてくださった友人 バクテリア 様

わしに小説の何たるかを教えてくれた師匠 荒井スミス 様

わしの小説に効果音とかつけるべきと教えてくれた恩人 ルシファ
ー 様

では、このような小説でない物をお読みいただき、真にありがとう
ございました（＃＾ー＾＃）

b y 澄田 康美

P S 、前書き後書きはリラックスしてやるのが吉。

後、幻想入り関係を書いている人は、気に入ったらもれなく
この澄田がレビューとかしちやいますからね。

それと、澄田が一番ガチで書いた短編は、「復讐の咎人」っ
て奴です。是非ともどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0737o/>

小説の神髓い???

2010年10月10日07時54分発行